



2011年3月31日 第36号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第54回 学術集会について

第54回 学術集会
会長 藤 哲

目 次

- 第54回学術集会について
- 日本医学会加盟ついでになる!!
- 故高岸直人先生の追悼文
- 玉井進名誉会員の外科殿堂入り
- 2010年度JSSH-ASSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドキャラリー (生田コレクション2)
- 委員会報告
- 代議員選挙について
- 専門医バッジ完成について
- 第17回春期教育研修会
- 第17回秋期教育研修会
- 専門医試験について
- お知らせ
- 編集後記

今回の東日本大震災は、発生時の地震の大きさ、その後の巨大な津波、そして原子力発電所の損傷による放射能と、我々の想像を超えた事態が続き、復興までの道のりがまだ見えておりません。

ご家族、ご友人、知り合いを亡くされた方、自宅、勤務先、家財に被害を受けた方にお悔やみを申し上げると共に、復興に向け一歩ずつでも前に進むよう願っております。

4月に青森で予定していた第54回学術集会は一時延期のお知らせをしておりましたが、一同に会しての学術集会は中止することに決定しました。

ただし、4月15日Web上で第54回学術集会を開催し、抄録集に掲載された演題はすべて発表されたこととして取り扱うことが決定しました。

また、5月には第54回学術集会の発表資料が閲覧できるWebサイトの開設を予定しています。条件を満たした先生には参加単位の申請ができるよう考えています。視聴方法等決定しましたらご連絡いたします。

なお、8月19日(金)に青森市で「震災復興支援 第54回日本手外科学会サテライトシンポジウム」を開催する予定です。詳細が決定しましたらこちらのご案内申し上げます。

大災害の影響は、我々手外科医が救済できる骨折や外傷だけでなく金銭的にも、心情的にも、日本全土に広がっていくと思います。

ひとつ私からお願いがあるのですが、この文書を読まれた手外科医の先生たちから率先して“Keep Your Chins Up”元気をだし、周りを明るくしていきましょう。

よろしく願います。



日本医学会加盟ついに becoming !!

去る2月23日開催の第78回日本医学会定例評議会において、下記のとおり日本医学会に加盟される学会が決定いたしましたので、ご報告申し上げます。

なお、今年度は28学会の申請数がありましたことを申し添えます。

記

日本プライマリ・ケア連合学会

日本手外科学会

という通達が生日本医学会長高久史磨氏より日本手外科学会理事長佐々木孝氏あてに去る3月15日送られてきた。

長年本学会の悲願として幾多の先輩理事、学会員が加盟を待ち望んできたわけであるが、上記のごとくその願いはついに成就されたわけである。これまで108の学会が加盟しており遅まきながら本学会もこれで大なる勲章お墨付きを得たことになる。

日本医学会について会員諸氏は必ずしも知悉しているとは限らないのでそのホームページ (<http://jams.med.or.jp/>) から概略をここに紹介する。

明治35年(1902)4月2日から5日まで、16の分科会が合同して第1回日本聯合医学会を上野の東京音楽学校において開催した。これを公式に本会の創設日とする。第3回からは日本医学会と改称し、以後4年ごとに開催、今日に至るまで連綿と継続されている。ただ、昭和22年開催の第12回総会のみ、終戦直後のため1年延期された。その12回総会で日本医学会の常設・恒久化が決議され、昭和23年3月8日に改組途上の日本医師会と合体した。日本医学会の活動は、あくまで学問中心で、その会員制度は学会単位の加盟である。現在、110分科会を擁している。

その目的は、上述の合体後、日本医師会定款第10章第40条に「日本医師会に日本医学会を置く」とされ、日本医学会は、日本医師会と密接な連携の下に、「医学に関する科学および技術の研究促進を図り、医学および医療の水準の向上に寄与する」ことを目的としている。

日本医学会の事業 日本医学会は上記の目的を達成するために、次のような事業を行っている。(1)日本医学会総会の開催 (2)日本医学会シンポジウムの開催 (3)医学および医療に関する情報の収集と伝達 (4)その他学会の目的達成上必要な事業

このように、今後は、日本医学会総会にも独自のプログラムを提案できるなど一段と日本手外科学会のステータスが上がったことになる。今回の加盟は、これまでの長い歴史と国内外における本学会の活動が評価された結果であることは言うまでもなく、伝統を培われてこられた先輩諸氏にあらためて感謝致します。また、本学会員は今後日本医学会加盟の学会員である自覚を持って日本手外科学会活動に一層精進して戴きたいと思ひます。

広報・渉外担当理事 落合直之 記

高岸直人先生を偲んで

福岡山王病院整形外科
副島 修



故 高岸直人先生

日本手外科学会名誉会員、高岸直人先生は平成22年10月10日ご逝去されました。享年89歳でした。高岸先生は肩関節学会でご高名ですが、手外科学会の振興・発展にも大きく寄与された方でした。そのことをあまりご存じでない若い先生方もいらっしゃるかと思いますので、先生のご略歴と合わせてご紹介させていただきます。

高岸直人先生は昭和21年九州帝国大学医学部を卒業され、九州大整形外科教室へ入局されました。昭和25年に九州大附属病院整形外科講師となり、当時は主に先股脱の研究をされていたと聞いております。昭和31年に、Dr. Bunnellより日本に手の外科を広めるよう使命を受けたDr. Harry Millerが来日され、天児民和教授のご指示で福岡-別府-神戸-奈良-京都と講演のお伴をされたそうです。実はこのことが一つのきっかけとなり、昭和32年に天児教授を会長として、第一回日本手の外科学会が神戸にて開催されました(詳しくは日手会記念誌をご参照ください)。この時のご縁で、昭和33年よりデトロイト・ウェーン大学病院Dr. Poschの下で2年間、手の外科を中心とした研究でご留学されました。同時期には広島大津下健哉先生もいらしたそうです。昭和35年に帰国されてからは、新設された広島日赤病院の整形外科部長としてご活躍され、当時我が国ではあまり知られていなかった手根管症候群や肩手症候群などについて、その病態や治療法をいち早く紹介されたお一人であったと聞いております。

昭和47年に新設された福岡大学整形外科教室の初代教授として赴任されてからは、肩関節外科の研究を主体とし、日本肩関節研究会(現 学会)を創設され、今日の礎を築かれたことは皆様ご存じのとおりです。手外科とのかかわりでは、昭和55年に九州手の外科研究会を創設され、また昭和58年に第26回日手会を主催されました。九手会では、いつも前列中央に腰かけて、後輩を熱心に指導されていたお姿が思い出されます。平成17年に私が会長を務めさせていただいた際にも、いつもの席から見守って下さり、壇上でのあいさつの際に大変勇気づけられました。「手の外科に興味を持つ者が手弁当持参で集まり、学会とは異なる自由な雰囲気の中で十分に討論を行う」とする、先生が掲げられた九手会創立時の気風は現在も脈々と受け継がれております。

先生は仕事も趣味も情熱を持って全力投球で取り組む方



日本海で船釣り (平成10年5月)

でした。お忙しい中にも暇を見つけては、趣味の釣りとテニスに興じていらっしゃいました。釣りのお伴は出来ませんでしたが、テニスでは約30年間御一緒させていただきました。教室の早朝練習・ナイターテニス、学内のテニストーナメント、福岡4大学整形外科対抗戦、九州6大学整形外科対抗戦、福岡県内医学部教授・助教授対抗戦（高岸杯）などなど、酷暑や小雪の舞う中でもいつも中心は先生でした。医学生時代にサッカーの国体選手として鍛えた強健な身体で、お亡くなりになる数年前まで現役のプレーヤーとして活躍されました。以前のように十分には走れなくなられてからも、常に高みを目指す前向きなお姿に感動しておりました。ご退任されてからは、テニス大会で福岡大の優勝がないことを常々嘆いておられ、優勝のご報告が出来なかったことが残念でなりません。

医の原点は「愛と和」であることを説いて、医師としてあるべき姿を私たち門下生へ示して下さいました。私も高岸先生の薫陶を受けた弟子の一人として、先生のご意志を受け継ぎ、それを糧にして前進して参ります。強くやさしい父のようであり、教室員を家族のように愛し慈しんで下さった先生。どうぞ安らかにお休みください。合掌。

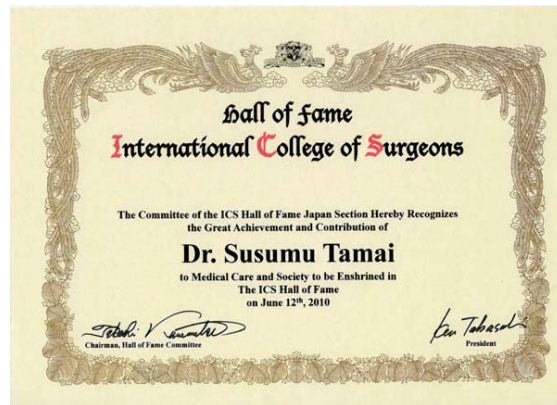


グループテニスで好プレー（平成15年9月）

名誉の外科殿堂入り

名誉会員
玉井 進

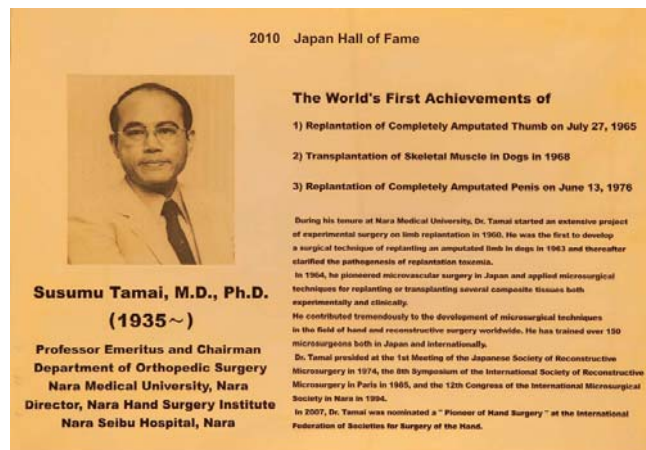
すべてのメスを持つ外科系医師の会である国際外科学会International College of Surgeonsの日本部会(1954年創設)にHall of Fame(名誉の殿堂)という顕彰制度がありまして、平成22年6月12日に東京で開催された日本部会で顕彰の栄に浴することができました。これは本会名誉会員の和歌山医大名誉教授玉置哲也先生と京都府立医大名誉教授平澤泰介先生のご推薦によって実現したものでありま



して、国際外科学会シカゴ本部外科歴史博物館内の「日本外科殿堂」の一室に、小生の写真と簡単な英文業績を刻印した銅板が飾られています。これまでに世界的な業績を挙げられた12名の著名な外科系医師が選ばれておられますが、整形外科学会からは第21号関節鏡を世界で始めて開発された高木憲次・渡辺正毅両博士のお二人がご一緒に2006年度に選ばれておられるだけでありますので、小生にとりましては極めて名誉なことでもあります。

(<http://www.ics-japan.org/museum/museum.html>)

このような栄誉を受ける事ができましたのも小生に切断肢再接着・マイクロサージャリー研究の場を与えていただき、ご指導いただいた奈良医大整形外科学教室ならびにご苦労下さった50有余名の協同研究者各位、ご指導・ご鞭撻いただいた日本手外科学会会員各位に深甚なる謝意を表します。



2010年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

慶應義塾大学 整形外科

佐藤 和毅

広島大学 整形外科

鈴木 修身

2010年度JSSH-ASSH Traveling Fellowとして第65回アメリカ手外科学会(2010年10月7-9日、Boston)に参加した前後に、アメリカの5つの手外科施設を訪問する機会を頂きました。3週間という短い期間でありましたが、とても充実した有意義な経験をすることができましたので報告させていただきます。昨年の日手会学術集会の会期中に、国際委員会の先生方や先輩のfellowの先生方から激励され、親睦を深め友人を多く作るようにとのアドバイスを受けて出発しましたが、訪問する先々で親切に迎えて頂き、多くの hand surgeonと知り合うことができました。良き相棒で生涯の友となりました佐藤和毅先生と共に、かけがいのない経験ができたことを感謝しております。前半の2施設および学術集会については鈴木が、後半の3施設については佐藤が報告いたします。(鈴木修身)

Massachusetts General Hospital (Boston, MA)

Bostonはアメリカ合衆国建国に深くかかわった伝統のある美しい街です。その一画に、美しい町並みに調和しつつも近代的なMassachusetts General Hospitalのビル群があり、ここで手と上肢の外科のチーフであるJesse B.Jupiter先生を訪ねました。Jupiter先生は外傷の治療経験が豊富で、変形治癒骨折の矯正骨切りなどでも高名であり、日本でも知己の先生は多いことと思います。有名な施設への訪問であり、また最初の訪問先でもあったので緊張もしていましたが、Jupiter先生の温和人柄に接して楽しく見学することができました。Bostonの中心部にある病院のほかに、車で1時間程の



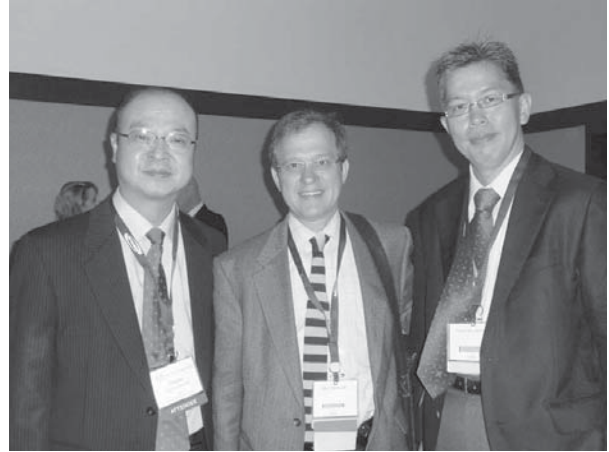
MGHにて 手術室でJesse B.Jupiter先生とともに

郊外に、整形外科の外来診療と外来手術を行う分院があり、その2カ所をわたり歩いて精力的に仕事をされていました。手術見学では手根管症候群や弾撥指の手術がほとんどでしたが、手術のいくつかは若いresidentが執刀しJupiter先生が鉤引きをしながら指導していたのが印象的でした。アメリカ手外科学会の直前で、大きな手術をいれていないので申し訳ないと言われながら、手術の合間にはご自身の過去の講演のスライドをいくつか持ち出されて、前腕や鎖骨の変形治癒骨折の治療方法などについて丁寧に教えて下さいました。また私達と前後してイギリス、スイス、ポルトガル、韓国からも見学者が来ており、多くの見学者を受け入れているようでした。

また2日目の早朝にはカンファレンスに参加しましたが、その日の手術方針について議論が白熱し、収集がつかなくなったのにはアメリカらしさを感じました。この日はスタッフのMudgal先生やRing先生の手術や外来を見学しましたが、診療とともにfellowやresidentの教育にも力を入れているという印象を受けました。Ring先生は家族ぐるみの日本びいきらしく、札幌で開催された日本整形外科学会ではバンド演奏もし、近くまた来日される予定とのことでした。

The 65th Annual Meeting of ASSH (Boston, MA)

次に同じくBostonで開催されました第65回アメリカ手外科学会に参加しました。オープニング・セレモニーではBostonにちなんで合衆国建国時の鼓笛隊を模したアトラクションがあり、国歌斉唱から始まりました。この学会はこれまでに何度か参加しましたが、演題の採用がきびしいために発表はいずれもクオリティーが高く、聞いているととても勉強になります。また、本来アメリカ国内の学会であり、国際学会ではないのですが、国外からの演題も年々増えてきているように感じ、オープンでフェアな学会だと思います。学会2日目にBunnel Fellowships Luncheonという昼食をとりながらのセッションがあり、イギリス、スペイン、韓国、エジプトからのfellowと伴に発表する機会がありました。佐藤和毅先生は肋骨からの骨軟骨移植による関節再建について、私は腕神経叢損傷に対する尺骨神経部分移行術について発表しました。手前味噌になりますが、私達日本人2人の発表が最も良かったように感じ、反応が良くて聴衆から多くの質問を受けました。特に佐藤先生の発表に対しては「職場に帰ってすぐに同じ治療をしてみたい」と言われたアメリカの先生がいました。また発表後にはアメリカ手外科学会のBunnel Traveling Fellowshipを経験した何人かの先生とも話すことができ、交流を深めることができました。また学会期間中、会場では多くの日手会の先生が、fellowがいるということで、声をかけて下さったりあるいは激励して頂いたことに感謝しております。



ASSH Annual Meetingの発表を終えて
Mayo ClinicのAllen T.Bishop先生とともに

Brown University (Providence, RI)

第2に訪問したのはRhode Island州のProvidenceにありますBrown UniversityのArnold-Peter Weiss先生でした。Providenceと言う街は日本ではあまり知られていないかもしれません。Bostonからは列車で約1時間の距離にあり、建国以来の歴史ある建物がBoston以上に多く残っている美しい街です。日本にたとえると京都か奈良という雰囲気でしょうか。私達が到着したのは祝日でしたが、駅に降り立つとWeiss先生がご自身の車で待ってられました。その日は女医で小児整形外科疾患を多く手がけておられるJulia A. Katarincic先生とともに、休日であるにもかかわらずdinnerにさそって頂き、整形外科の話や日本の話に花が咲きました。翌日から見学が始まりましたが、Weiss先生は手根管症候群の手術で用いる器具をご自身で作るなど創意工夫に富んだ先生で、その手技を実際に見せて下さいました。指の関節に用いるsilicone implantもデザインし、多くの例で使用していました。



Brown Universityにて
Arnold-Peter Weiss先生を囲んでの夕食会

見学2日目の早朝には整形外科と形成外科の合同のカンファレンスがありました。Weiss先生は整形外科のhand groupのチーフですが、この病院には形成外科にもhand groupが存在し、連携が良く取れているように感じました。両方のgroupで20名から30名のfellowやresidentが研修しているのには驚き、また頼もしく思いました。また日本に帰国した後、佐藤先生と私のもとにそれぞれWeiss先生から郵便が届き、暖かいメッセージとともに記念品のピンバッジを頂いたのには感激しました。

Mayo Clinic



Mayo Clinicにて Fellowたちとの夕食会

ことが出来ました。若いfellowやresidentが意見を言いながら積極的に手術に参加している姿が印象的でした。とても能率的、機能的で且つ患者さん本位の外来システムにも感心致しました。鈴木修身先生が以前在席していたDr. Bishopのラボ (Micro Surgery)、そして山口大学から留学中の橋本貴弘先生にお願いしてバイオメカのラボ見学をさせて頂きました。数多くの優れた業績を出すラボではありますが、雰囲気は非常に和やかでアットホームな印象を受けました。

訪問中の二日目朝6:30より手外科カンファレンスがあり、高名な先生がされた手術例に対して若手医師が、適応に問題があるのでは、などと意見している様子に少々驚くと共にその活発な意見交換に感銘を受けました。このカンファレンスでわれわれtraveling fellowは各々15分のpresentationの機会を与えられ、私は“Costal Osteochondral Graft for Cartilage Defects or Disorders in Upper Extremity”、鈴木先生は“Quantitative Intraoperative Electrodiagnosis During a Partial Ulnar Nerve Transfer to Restore Elbow Flexion Following a Brachial Plexus Injury”についてshort lectureを致しました。

また、訪問期間中のfellowたちとの夕食会では、若手医師たちの野心、忌憚のない意見が聞け、またDr. Shinらスタッフとの食事会では、手外科の将来像などを熱く語り合うことが出来ました。

University of Michigan

形成外科医であるDr. Kevin Chungがホストとしてわれわれを迎えてくれました。この訪問で最も印象的であったことは、Dr. Chungが臨床研究のために構築した能率的なシステムです。Physical assistantと呼ばれる数名の助手が、予診をとり、手術適応の患者に対する手術説明、予定組みなどの他、術後患者の処置、リハビリ・オーダー、臨床評価、画像整理まですべてこなします。これらのデータは各々のプロジェクトを担当する秘書に渡され、統計解析などが行われます。Dr. Chung自身の仕事は、診断の確定、手術適応の決定、手術、そして臨床プロジェクトおよびphysical assistantなどスタッフの管理ということになります。この合理的なシステム



University of Michiganにて
Chung先生、fellow、residentとともに

により質の高い臨床研究、論文を量産しています。University of Michiganでは、日本医大形成外科から留学中の小野真平先生に大変お世話になりました。訪問中のhand surgery conferenceでは、症例検討時に意見を求められ、また20分程度のmini lectureの機会を頂きました。

Washington University in St. Louis (WUSTL)

余談ではありますが、Washington州にあるわけではなく、またWashington DCでもないのに何故Washington University in St. Louisであるのか訪問前から疑問に思っていました。この名称はアメリカ初代大統領のGeorge Washingtonにちなんだ名前であり、シアトルのWashington Universityとの混同を避けるためにin St. Louisが後付けされたそうです。

ホストのDr. Richard Gelbermanは、穏やかでかつ非常に細やかな気配りをされる先生でした。外来および手術でも事細かに経過などを説明して下さいました。手術中は、「君ならどのような治療法を選択するか」など、われわれの意見を聞いて下さいました。また、Dr. Gelberman



Washington University in St. Louisにて
手術室でGelberman先生と

が若い医師を熱心に教育する姿は非常に印象的であり、とくに毎週金曜日の朝6:30から自らがcadaverを使った解剖の勉強会をされていて、residentおよびfellowに教える姿に彼らに対する愛情を感じました。彼らもDr. Gelbermanを慕っている様がよく伝わってきました。

Dr. Gelbermanやスタッフ、フェローとのディナーでは、”学会およびJournalにacceptされやすい臨床研究テーマ”の話からオバマ政権の功罪まで幅広い話題で盛り上がり、楽しい時間を過ごしました。Dr. GelbermanをはじめとしてDr. Calfee、その他のスタッフは非常にまじめで、日々の診療そして教育に真摯に取り組んでいることを実感致しました。今回のtraveling fellow訪問の最後を締めるにふさわしい、すばらしい施設でした。

私事ではありますが、2001-2002年にState university of New York at Buffaloにresearch fellowとして留学をし、研究の合間に可能な範囲で臨床見学を致しました。しかし、私の心の中には、より多くの時間を臨床の研修に使いたかった、という後悔の念がずっと残っていました。それ故、今回のtraveling fellowは出発前から非常に楽しみにしており、訪問中も米国手外科の臨床や合理的な臨床システム、教育研修システムを貪欲に見学し、吸収出来たと思っております。また、訪問中に会ったアメリカの手外科医師たちとの交流はかけがえのない私の一生の宝になると思います。これらの経験を自らの今後の礎にするとともにこれからの日本手外科学会、そして日米手外科交流のお役に立てれば、と思っております。

この報告記を終えるにあたり、かくもすばらしい経験の機会を与えて下さった前理事長の三浪明男教授、国際委員会前担当理事であり多くの助言を下された別府諸兄教授、国際委員会委員長の池上博泰先生をはじめ委員の皆様、長期間の不在をお許し下さった慶應義塾大学整形外科戸山芳昭教授、広島大学整形外科越智光夫教授と教室の諸先生に深謝致します。そしてこの旅行中に大変お世話になった相棒の鈴木修身先生には心よりお礼を申し上げます。(佐藤和毅)

手は語る ハンドギャラリー (生田コレクション2)

踊る手

広島手の外科・微小外科研究所
生田 義和

インド古典舞踊では「手の型」のことをムドラーMudora、またはハスタHasta と呼び、それには、両手のもの (Samyuta Hasta) が24種、片手のもの (Asamyuta Hasta) が28種あります。両手ハスタには、アンジャリ①、スバスティカ②、プシュパプタ③、シバリング④、シャカタ⑤、その他(注1)があり、この内1番目のアンジャリは合掌の型であり、3番目のプシュパプタは色々な場面、例えばある製薬会社の広告などにも使用されている比較的ポピュラーな型であります。



アンジャリ①



スバスティカ②



プシュパプタ③



シバリング④



シャカタ⑤

一方、片手ハスタには、パタカ⑥、マユラ⑦、アルダカンダ⑧、カピタ⑨、カタカムカ2⑩、その他(注2)などで、この内7番目のマユラは孔雀のことで、この言葉は日本でも良く使われています。



パタカ⑥



マユラ⑦



アルダカンダ⑧



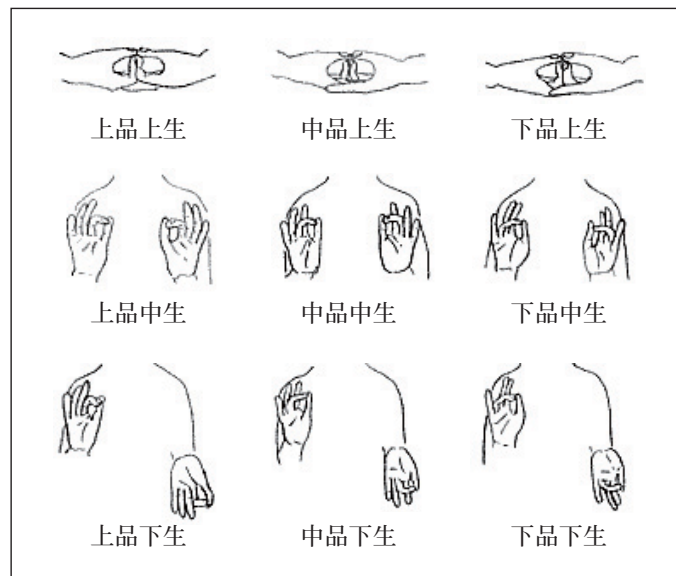
カピタ⑨



カタカムカ2⑩

一方、密教ではムドラーのことを印相、印あるいは密印と呼んでいます。これについては、1959年の新潟大学卒業で、新潟市で斎藤整形外科を開業されておられる斎藤信夫先生が出版された「指の文化史」(新潟雪書房、平成4年発刊。絶版と聞いています)の中の「指と宗教」に印相として詳しく記述されています。すなわち、仏像の特徴を明確にするために、手の型が厳しく決められていて、これを印相、あるいは印契(いんげい)といい、例えば金剛界大日如来の智拳印(ちけんいん：忍者の印に似ている)、釈迦如来の降魔印(ごうまいん：右手人差し指を伸ばして地面(番)に付ける)、阿弥陀如来の九品印(くほんいん)などである。この九品印には9種類あり、次のようなものであると図示してある。少し補足しますと、次のようになります。すなわち、仏の教えを聞いて修行し得る能力、また仏の教えを理解する度量・器の違いによって、人間は同じ極楽浄土へ往生するにも、9つのパターンがあると『観無量寿経』に説かれています。これは九品往生(くほんおうじょう)と言われており、九品とは「上品(読み方は、じょうほん、でも、じょうひん、でもなく、じょうぼん、と濁る)、中品(ちゅうぼん)、下品(げぼん)」で、それぞれが上生(じょうしょう)、中生(ちゅうしょう)、下生(げしょう)に分れており、全部で九品(くほん)となる。下の9種の図は、それぞれ上品上生(じょうぼんじょうしょう)から下品下生(げぼんげしょう)までの印相を示している。なお、「あの女性は上品だ」とか「あの男性は下品だ」などの言葉はこの九品からきておりますが、ご存知の如

く、現在「あの先生は中品だ」のような使い方だけは日常単語として採用されていません。ちなみに、九品寺と呼ばれるお寺は奈良の戒那山「九品寺」、鎌倉の内裏山「九品寺」などを初めとして、日本各地にあります。東京には九品仏という地域名があり、世田谷区奥沢六丁目、七丁目付近を指しますが、この地名の由来は、東急大井町線の九品仏駅前に九品山「浄真寺」からきています。この寺には3年に一回、本堂と上品堂の間に渡された橋を菩薩の面をかぶった僧侶らが渡る「お面かぶり」と呼ばれる行事（正式には二十五菩薩来迎会）があり、菩薩の来迎の様子を表すもので東京都の無形文化財に指定されています。私は昭和32年にこれを拝仏しましたが、最近のネットに平成20年の開催記事がありましたので、今年、平成23年8月にも開催されるのではないのでしょうか。



下の絵は、インドネシア・ジャカルタで開催された「手の外科ワークショップ」に講師として参加した折、ジョグジャカルタまで足を伸ばしてプランバナナ遺跡やボロブドゥール遺跡を見学し、さらにマタラム王国の貴族が形成したジャワ文化のひとつである宮廷舞踊を見物した。元来この宮廷舞踊は神聖なものとして宮廷内でのみ大切にされてきたものであり、王家の子の教養の一つとして古くから続いていたものであるが、1920年頃ジャワ王家の王子たちが舞踏協会を設立して一般に公開した後、一般庶民にも親しまれるようになったものとのこと。宮廷のなかにある大理石の床の上で、ガムランの音楽に合わせて、古式ゆかしく踊る女性の手の動きの美しさに惹かれて写しとった二人の踊り子の右手であります。母指と中指は指尖部で接触するのではなく、母指が中指を抑える形であり、インド舞踊とは異なった手の型の意味があるのかもしれないし、爪の長さは二人が揃っておらず、また片手の内でも伸びた指とそうでない指があって奇異に感じるが、これにも意味があるのかもしれない。ご存知の方は教えてください。



注1: カボタ、カルカタ、ドラ、ウテュサンガ、カタカヴァルダナ、シャンカ、チャクラ、バシヤ、キラカ、マーツヤ、クールマ、ヴァラーハ、ガルーダ、ナガバンダ、カチャバ、ベルンダなど。

注2: トリパタカ、アルダパタカ、カルタリムカ、アララ、シュカテュンダ、ムシュチ、シクハラ、カタカムカ1、カタカムカ3、スチ、カンデュラカラ、パドマコシヤ、サルパシルシヤ、ムリガシルシヤ、シムハムカ、カングラ、アラバデュマ、カテュラ、ブラマラなど。

委員会報告

財務委員会

委員長 三上容司

財務委員会は、平成22年に新設された新しい委員会です。本委員会の任務は、手外科学会の財務全般を管理し、健全な財務運営を行うことです。今年度のメンバーは、平田仁担当副理事長、麻生邦一アドバイザー、根本孝一アドバイザー、三上容司委員長、中村俊康委員、島田幸造委員で、外部アドバイザーを松本公認会計士にお願い致しました。第1回財務委員会は、平成22年5月30日に開催されました。学会が社団法人に移行したことに伴い、より厳格な財務運営が求められる点を踏まえ、まず、委員会の役割を討議いたしました。その結果、徹底した財務管理により無駄な支出を省き、必要な事業への投資余力を拡大できるように促し、これにより健全な学会運営に資することが委員会の基本的な役割であるとの認識に達しました。これに基づいて、過去の決算報告を精査し、平成22年度予算案を討議しました。第2回財務委員会は、平成22年7月24日に開催されました。平成22年1月1日～5月12日の収支決算が検討され、予算案も討議されました。その後、インターネット上での会議が断続的に続けられ、平成22年10月14日の理事会に平成22年度予算案を提出し、承認されました。また、手外科学会と現事務局(株式会社コングレ)との業務委託契約の締結に際し、財務委員会から財務運営上の観点からの提言を理事会に上申しました。

委員会開催とは別に、月毎の収支の確認作業、委員会開催に要する経費の確認・承認などを日常的に行なっています。

手外科学会の重要な業務を遅滞なく遂行できるよう財務面から支えるためには、身の丈にあった支出が求められます。会員の皆様方には、時に耳の痛いことも言わなければなりません。本学会の健全な財務運営に今後ともご協力、ご理解のほどをお願いいたします。

教育研修委員会

委員長 高原政利

平成22年度は、稲垣克記と磯貝典孝の2名が委員を退き、矢島弘嗣(理事)、高原政利、酒井直隆、清水弘之、山本謙吾、信田進吾、日高典昭、青木光広、田中克己の9名で2度の教育研修会を開催しました。

1. 第16回春期教育研修会Advanced course(平成22年4月17日(土):新潟市/朱鷺メッセ)
2. 第16回秋期教育研修会Basic course(平成22年9月4日(土)・5日(日):奈良県文化会館)

手外科を志す先生や手外科専門医を目指す先生には、大変好評を得ております。受講した先生は専門医試験問題が簡単に解けるようになること間違いありません。今後も、春はadvanced course、秋はbasic courseとして、手外科専門医にもご満足いただけるトピックスを盛り込み、ホットな講師を選出して参ります。何度受講しても、どなたでもご満足いただける研修会を開催しますので、ぜひご参加の程、よろしくお願い申し上げます。

今年度の日手会が変更になりましたので、春期教育研修会を大阪にて開催することになりました。ぜひ、ご参加下さい。

3. 第17回春期教育研修会Advanced course (平成23年6月4日(土): 大阪市／大阪国際会議場)

4. 第17回秋期教育研修会Basic course (平成23年9月2日(金)・3日(土): 札幌市／北海道大学医学部学友会館フラテ「ホール」)

専門医を取得するにあたり最低1回は秋期教育研修会を受講することが義務づけられました。専門医の資格を取りたいと考えておられる先生方は、必ず秋期教育研修会を受講されるようお願い致します。

編集委員会

委員長 池田和夫

牧 裕担当理事と平田仁アドバイザーのもと、編集は、尼子雅敏、岩崎倫政、岡島 誠一郎、長田伝重、酒井昭典、藤尾圭司、松崎浩徳の各委員が担当しました。また、准編集委員として、秋田 鐘弼、有野 浩司、恵木 丈、千馬 誠悦、武石 明精、田中 克己、帖佐 悦男、津村 弘、平地 一彦、小泉 雅裕、沢辺一馬、建部 将広、田中 利和、中村 智、平原 博庸、村田景一の各先生方に編集の仕事をお手伝いいただきました。

オンライン投稿・雑誌編集を導入してから2年が過ぎ、順調に編集作業が進行しています。

第27巻分は227件の投稿を受け付けました「参考：第26巻(2010)は183編」。編集委員は約17-18編、准編集委員は約8-9編の編集作業を行いました。212論文が既に採用となりました。まだ、査読中もしくは編集中が5論文で次巻に掲載予定です。また、10論文は残念ながら不採用となっております。

新しくなった点は、英文抄録を除き論文1ページ目の構成をすっきりさせて、論文ページ数を減らすことに成功しました。また、発行時期は1年に5回と薄めるのではなく、次回学術集会までに(約半年間)、前の学会分の投稿論文を雑誌に掲載してしまいうことができました。したがって、去年の発表論文を参考文献として、次回の発表・論文作成時に確実に引用可能となりました。別刷りはPDFとしたので、印刷代・郵送料・手数料などが削減できました。

課題は、雑誌本体をオンライン化することです。紙の雑誌に愛着を持つ会員も多くおられることと思いますので、早急に結論は出ませんが、継続審議の重要課題です。オンラインにすれば、多くのメリットがあります。写真はカラーにでき、製本して書棚を占拠することもなくなり、昔の論文を紛失することもなくなります。また、医中誌との連結も可能です。予算の多くを、雑誌の印刷・郵送料に取られている現状を考えると、いずれオンライン化への流れは確実と考えています。

機能評価委員会

委員長 五 谷 寛 之

機能評価委員会は平成22年度に金谷理事が現根本理事に、委員長が面川から五谷に交代となり新委員として大井 宏之が加わっています。委員は6名で安部幸雄、今枝敏彦、百瀬敏充、森友寿夫(五十音順)とともに活発な委員会活動を行っています。平成22年度の委員会は学会に併せた委員会が3回、その他メールによる委員会が開催されています。最優先の目標は平成24年末に予定されている機能評価表の改訂です。

- 1) 今枝委員担当の日手会版PRWE (Patient rated wrist evaluation) の妥当性検証がJOSに掲載されました(J Orthop Sci 15 (5) : 509-517, 2010)。日手会ホームページのプルダウンメニュー「お知らせ」→「DASHについて」からダウンロードできます。
- 2) 森友委員担当のHand20 (Hand Frontierによる) の妥当性検証のため、引き続いてデータを集積しています。
- 3) 五谷担当の再接着肢・手・指における日手会評価基準の妥当性検証のためデータ集積を継続しています。
- 4) 各委員の分担でASHT (American Society for Hand Therapist) のClinical assessment recommendationを参考に客観的評価の取得法の日米の違いについて検討中です。
また、大井委員が窓口となり日本ハンドセラピィ学会とも協力して客観的評価の整合性を検討していきます。
- 5) 手関節機能評価について日手会版を改訂すべく安部委員が担当となって作業を進行しています。
- 6) 面川前委員長が担当していた尺骨突き上げ症候群に対するPRWEの反応性検証のための作業も継続中です。

前年度に引き続いてMHQ (Michigan Hand Questionnaire) の日本語版の妥当性検証も百瀬委員を担当に議論を継続しております。また、機能評価表の媒体についてもホームページを有効に生かせるか、可能性について検討します。

国際委員会

委員長 池 上 博 泰

平成22年度の国際委員会は、金谷文則担当理事、別府諸兄アドバイザーの下、村瀬剛、池田全良、副島修、南野光彦、松下和彦、安田匡孝の6名の委員と委員長の池上博泰の計9名で構成しております。

1. Travelling fellow の選出

国際委員会では、各travelling fellowの選出を行い理事会に推薦しています。

- a) JSSH-ASSH travelling fellow
秋田鍾弼氏、金谷耕平氏の2名をJSSH-ASSH travelling fellowとして推薦しました。平成23年のASSHに出席していただく予定です。
- b) JSSH-HKSSH exchange travelling fellow
今年度は山崎 宏氏を選出しました。2011年3月に行われた香港手外科学会に出席されました。

2. 海外から来日するfellowのサポート

学術集会に合わせて来日する予定であった米国Bunnel fellow(Jennifer Moriatis Wolf, MD)および香港手外科fellow (TSE Wing-Lim, MD)の旅程や訪問先をアレンジ・サポートしていましたが、学術集会の形態変更に伴い、今後の予定を検討します。

3. Corresponding Member, Honorary Memberの推薦

本年度は特に推薦はありませんでした。これからも推薦用紙をホームページに掲載して、年3回の委員会および理事会での審議を要することを明記のうえ、常時Corresponding Member, Honorary Memberの推薦が可能であるようにしていきます。

4. 日手会ホームページの英語版の充実

広報委員会とも協力しながら日手会ホームページの英語版を充実して、日手会活動報告を海外にむけて充実させていくことが提言されました。具体的には、役員、各委員会などの英語名をすでに確認し、決定しました。今後は、日手会の組織・歴史などの紹介、外国からのアクセスをスムーズにする(メールアドレスを明記して質問に対応するなど)、IFSSHやAPFSSHなどと相互リンクをはることなどを考えています。

5. 第5回日米手外科学会合同会議のサポート

2011年3月26-29日に予定されていた第5回日米手外科学会合同会議では、国際委員会としても種々のサポートを行ってきました。しかし、今回の東日本大震災の影響により合同会議そのものが中止となりました。

広報渉外委員会

委員長 島田幸造

平成22年度の広報渉外委員会は新担当理事に落合直之先生が就かれ、副島修前委員長に代わって島田幸造が新委員長を拝命して新しい体制がスタートしました。とは言っても前担当理事の田中寿一先生には引き続き堀内行雄先生とともにアドバイザーになっていただいております。今谷潤也、小野浩史、佐藤和毅、白井久也、藤岡宏幸(五十音順)の各委員が留任していますので、比較的スムーズに活動をひきつぐことができました。例年通り日手会ニュースの発行に加え、専門医バッジの作成(間もなく専門医の先生方にお配りできる予定です)や手外科パンフレット関連の事業の継続、そして何よりも懸案である、学会全体のIT化に並行したHPのIT化事業(特に会員管理システムを加えたシステム変更、更新に向けての内容検討など)が主たる活動内容となっています。

1. 新HPの充実:事務局の移転に伴い全面的に刷新したHPですが、機能充実にはまだ準備が必要です。すなわち会員管理システムの導入や、オンライン投稿機能、今後の専門医制度見直しに伴う研修講演の受講管理機能や症例登録機能などです。システム提供会社との交渉を経て来年度からは学会独自のサーバーを持ち、比較的少ないランニングコストでの充実した機能を盛り込んでゆく予定です。
2. 手外科パンフレット・DVD: #27まで完成した手外科パンフレットの普及を海外でも広めてゆくために英語版を作成しました(現在校正中)。これをもとにタイ語版が作成される予定です。またDVD化についてもVol. 2の作成を準備中です。
3. 日手会ニュース:例年通り年2回(34号、35号)のニュースに加えて、佐々木新理事長就任に伴う号外を発刊しました。昨年からはHP上にPDFファイルの形で掲載を開始したことで大幅な経費節約になっております。今後もHPをまめにチェックされますようお願いいたします。また、12回にわたって連載され好評であった「ハンドギャラリー “児島コレクション”」が終

了したのにつき、生田義和広島大学名誉教授に「ハンドギャラリー“生田コレクション”」をお願いしたところ快諾をいただき掲載が始まりました。これまでとはまたちょっと違った趣きの「手」に関する絵や写真とともに先生の含蓄深い文章をお楽しみください。

4. 手外科専門医バッジ:専門医となられた会員の先生方へ贈呈する故田島達也先生デザインのバッジが完成しました。近いうちに専門医の先生方のお手元に届くことと思います。
5. 来年の日整会学術集会への「手外科学会」としてのテーマ提言:2012年に京都で開催される日本整形外科学会ではspecialty dayが設けられるとのことで、それも含め学術集会での研修講演やシンポジウムの内容・テーマの提案を理事会より委託されました。委員会内で検討の上、手外科学会案として理事会に提言致しました。

とにかく最大の懸案であるHPの充実、システム更新に一定の道筋が立ったことで、いよいよ日手会もIT化が一気に進むと期待されます。渉外活動を含め、委員一同その充実に邁進している1年であったことを報告いたします。

社会保険等委員会

委員長 清 重 佳 郎

社会保険等委員会の活動は外保連活動と学術集会ランチョンセミナー開催の2本立てであるが、22年度は活発化した外保連活動に多くの労力が裂かれた。

22年度診療報酬改定においては、厚労省が改定の骨子に「我が国における手術の技術水準を確保するため、手術料について重点的な評価を行う。なお、評価に当たっては、外科系学会社会保険委員会連合(外保連)作成による「手術報酬に関する外保連試案」の精緻化がすすんでいるため、これを活用する」と詠い、整形外科関連では外保連手術難易度DおよびEがそれぞれ30%および50%アップした。これを受けて外保連では更なる試案の精緻化に取り組み、23年春を目標に(24年度大改訂のため)新たに麻酔試案の作成、手術、検査、処置試案の改訂を遂行している。

現在日手会から試案に記載されている技術は、

- ・処置試案: 靭帯性腱鞘内注射 (3,520円)、知覚再教育
- ・検査試案: Semmes-Weinstein monofilamentによる精密知覚機能検査、手根管圧検査
- ・麻酔試案:

伝達麻酔試案(超音波加算あり)	
腕神経叢(腕神経叢、腋窩部橈骨・正中・尺骨・筋皮神経等)	15,033円
前腕・手関節(前腕および手関節部橈骨・正中・尺骨・前腕皮神経等)	6,008円
中手・指/中足・趾(掌背側指・趾神経)	3,528円
大腿・膝窩(大腿・坐骨・膝窩・伏在・腓腹神経等)	8,010円
足関節(前後脛骨・浅深腓骨・腓腹神経等)	6,008円

および、手術通則14「同一指列手術に関節内骨折観血手術・関節脱臼観血手術・関節形成術・関節固定術(「3」指(手・足))を追加すること」を申請している。

試案精緻化にはエビデンスや実態調査が求められているため、靭帯性腱鞘内注射の新規記載に際しては、日手会研修施設を対象に調査を行い(日手会誌2010; 27: 1-6)その結果を基に申請を行った。この紙面をお借りして協力いただいた諸先生に深謝いたします。また、精密知覚機能検査・知覚再教育については日本ハンドセラピー学会に実態調査をお願いしているところである。

先天異常委員会

委員長 香 月 憲 一

今年度の委員会のメンバーは光嶋勲担当理事、川端秀彦アドバイザー、石田治アドバイザー、荻野利彦委員、高山真一郎委員、堀井恵美子委員、福本恵三委員、射場浩介委員と私の9名で構成されています。本委員会の活動には手の先天異常懇話会、手の先天異常症例の登録、先天異常手の機能評価基準の作成、手の先天異常に関する用語の統一などがあります。私達は委員会の活動を通して、手の先天異常を有する患者さんが等しく高い水準の治療を受けられるような社会を作っていきたいと考えています。

1. 手の先天異常懇話会

例年、学術集会期間中に開催しておりましたが、本年度は学術集会の中止に伴い、残念ながら中止とさせていただきます。

2. 手の先天異常症例の登録

高山真一郎委員の精力的な活動のおかげで、一昨年度より裂手症関連症例の症例登録を開始し、現在委員会のメンバーの施設の症例を中心に140例ほどの登録が完了しています。さらに症例数を増やすとともに、今年はこのデータを整理して、分析に取りかかる予定です。

3. 手の先天異常の評価基準

射場浩介委員の甚大なご努力により、「FDTを用いた母指形成不全症評価の多施設研究」の研究計画書が完成。倫理委員会での審査も終了し、多施設研究を開始しました。

4. 手の先天異常に関する相談システム

手の先天異常症例の診断や治療でお困りの先生方のために相談コーナーを設けようという計画案が出ており、現在ホームページの会員専用コーナーを利用したシステムの構築を考案しています。

5. 手の先天異常分類マニュアル

2000年に先天異常委員会で作製した先天異常分類マニュアルを多くの先生方に利用していただくために、学会のホームページから自由にダウンロードできるようにしたいと思います。

今後とも会員の皆様のご支援、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

倫理委員会

委員長 重 富 充 則

当委員会は平成16年に発足し、本年度で活動7年目となります。主な活動内容としましては、新規学会入会希望者の審査と倫理審査です。

平成22年度は担当理事が越智光夫先生から砂川融先生に、委員長も渡邊健太郎先生から小生に交代となりました。担当理事、委員長以外の委員会のメンバーとしては、塚田敬義アドバイザー(再)、福本恵三委員(再)、吉田健治委員(新)、西田淳委員(新)、深谷和子外部委員(再)、山我美香外部委員(再)という構成であり8人体制で活動しています。

1. 入会審査

入会審査対象者は、正会員106名、準会員5名であり、審査の結果全員「承認」として理事長に答申致しました。

入会申込者が推薦者として依頼できる代議員に心当たりがない場合には、日本手外科学会学術集会あるいは関連学会、研究会参加時に個別に理事あるいは代議員に直接依頼していただくことが理事会で決定しました。理事および代議員の先生方におかれましては、学会等で新入会申込み時の推薦を依頼されました折にはご協力のほど宜しくお願い致します。

2. 倫理審査

①先天異常委員会主導の臨床研究に関する倫理審査

先天異常委員会主導の臨床研究に関する倫理審査は、前年度の再申請案件であり協議の結果「承認」として理事長に答申致しました。

②社会保険等委員会主導の調査に関する倫理審査の必要性の検討

社会保険等検討委員会主導のアンケート調査は、“実際には委員会会議の2ヵ月前にすでに実施された調査であったが、倫理委員会にて審議されるべき内容であったのでは?”、と事後ではあるが審議の依頼があったものです。審議の必要性を含めて検討した結果、日本手外科学会として何か研究を行う際には審査対象外になったとしても事前に倫理委員会に諮った方が良いが、本調査は「臨床研究」ではなく「疫学調査」または「医療統計」とみなし倫理審査は不要であるとの結論に至りました。

③学術研究プロジェクトの応募研究の倫理審査

学術研究プロジェクトに採択された2件の研究の倫理審査はメール審議と致しました。審議にあたって、まず学術研究プロジェクトの倫理審査のあり方が議論となりました。討議の結果、学術研究プロジェクト応募研究では各主任研究者が所属先での倫理審査を経て、その結果を日本手外科学会の倫理委員会が追認するという方向で審査することとなりました。この方針に従い2件の研究機関における倫理審査を待って審議しました結果、1件については「承認」、もう1件については「当委員会からの見解を付しての承認」として理事長に答申致しました。

学術研究プロジェクト

委員長 藤 哲

1. 平成22年度学術研究プロジェクトの選考結果

平成22年度学術研究プロジェクトに対して5件の応募がありました。学術研究プロジェクト各委員による厳正な評価の結果、本年は下記の2件を採択し、倫理委員会ならびに理事会にて承諾を得ました。

- ①. 超音波動態解析による特発性手根管症候群の診断指標の確立
代表 吉井 雄一(筑波メディカルセンター病院)
支援助成金 700,000円
- ②. 橈骨遠位端骨折内固定術後の早期ビスフォスフォネート製剤投与が骨癒合とADL獲得に与える影響
代表 内山 茂晴(信州大学医学部医学科)
支援助成金 300,000円
(スポンサー付き企画であり、少なめの助成となっています。)

2. 平成20年度に採択された4件の学術研究プロジェクトの研究進捗状況の報告および成果の公表について

研究成果は、平成23年8月末日までに、日手会学術集会での発表および日手会またはHand Surgeryへの投稿が義務付けられているが、第53回学術集会までの学会で発表ができなかったプロジェクトに関しては、次回第54回学術集会(別府会長)での発表を依頼することにした。

3. その他

応募要領のテーマに『手外科分野の、高いエビデンスが得られる臨床研究』とあるが、『多施設・前向き研究が望ましい』と書き加える。

専門医制度委員会

委員長 別 府 諸 兄

- 第1回専門医制度委員会 2010年 8月 1日
- 第2回専門医制度委員会 2010年 9月 5日
- 第3回専門医制度委員会 2010年10月14日
- 第4回専門医制度委員会 2010年 1月 8日

日本手外科学会は2010年6月4日に厚生労働省に、日本専門医認定機構(専認構)入社ならびに一般社団法人「日本手外科学会」になったことを報告した。

さらに、①法人格を有している、②専門医試験を実施し認定している、③医師のみによる学術団体、④3300余の会員を擁するなど、いわゆる外形基準を満たしたことから、「広告のできる専門医」の申請をした。

厚生労働省の担当部局の回答は、

- ①「移行措置による専門医の質の担保法を明示する。」つまり、移行による専門医認定時にも**試験などの手段**で一般社会からも納得される専門医資格の透明性を確保するべきである。
- ②「専門医の更新時に診療実績を提出することを規則の文言に盛り込む(現役であることの証明は確実に必要)」。つまり、専門医の更新に当たっては、**現役で外科治療を行っている証明**をすることが望ましく、**症例提出などの条項を設ける**べきである。
- ③日本専門医制評価・認定機構(専認構)に「**広告のできる専門医**」に関して、事前協議をすることが必要。

これらのことを受け、理事会、代議員会で、日本手外科学会専門医は「**広告のできる専門医**」を目指す方向と結論した。

その結果、**専門医制度委員会**を再度立ち上げ、厚生労働省の要求の実現の可能性について審議をしていくこととした。

● 日手会専門医制度委員会構成

担当理事：土井一輝、アドバイザー：三浪明男

委員長：別府諸兄

委員：加藤博之(カリキュラム委員会 専門医試験委員会)

矢島弘嗣(専門医資格認定委員会)

川端先生(施設認定委員会)

牧野正晴、清重佳郎(Web登録委員会)

● 特例措置専門医試験

専認構指導により、特例措置専門医も試験を行う必要がある。第1回特例措置専門医試験は、平成23年4月16日(土)16:00~17:00、平成22年度定時総会終了後、場所:東京ステーションコンファレンス、30分の講演後、筆記試験を行う。

なお、特例措置専門医のための講演は、指導者講習会も兼ねる。

第2回特例措置専門医試験は、平成23年第17回日手会秋期研修会時、札幌で行う。

第3回特例措置専門医試験は、第55回日本手外科学会前後、横浜で行う予定である。

● 専門医更新時における手術症例の提出

5年間で、150例の臨床症例(内、手術症例は120例以上)の提出を行う。症例は、今回は特例として紙面での提出も可とする。指導医は、術者、介助者だけでなく、手術患者の指導責任者でも可とする。

● ホームページへの手外科専門医像の掲載

専認構、厚生労働省指導により、整形外科・形成外科専門医と手外科専門医の差別化を明確にし、かつ、サブスペシャリティの特徴を明記した手外科専門医像を掲載する。手外科専門医像としては、ルーペ、顕微鏡などの拡大下手術によるAtraumatic Techniqueによる上肢手術を行う専門医とした。

● カリキュラム再検討

現在の手外科専門医申請のための、必須研修分野11項目中6項目は、専認構、厚生労働省から、サブスペシャリティの専門医の条件としては緩すぎるので、全分野における必須が可能なように、カリキュラムを再構成する。基本分野としては、I皮膚・皮下組織・筋腱、II神経・血管・リンパ管、III骨・関節・靭帯、の大項目として、中項目に現在のカリキュラム項目を付随させていき、大項目3つの症例をすべて研修することを、今後の専門医申請の条件とする。詳細については、カリキュラム委員会で検討する。

● 専門医制度に関する委員会

専認構専門医制度整備指針第3版によると、専門医制度に整備する委員会として、専門医制度委員会、カリキュラム委員会、専門医資格認定委員会、専門医試験委員会、施設認定委員会が指定されている。

● 将来方針

2015年以降は、専門医制度は、厚生労働省から、専認構のみの施行事業となるので、それ以前に厚生労働省の認める宣伝できる専門医制度として採択されるように活動していく。当然、基本領域学会である日本整形外科学会、日本形成外科学会の専門医制度のサブスペシャリティとして採択されるように方向付けする必要がある。

一般社団法人 日本手外科学会のホームページ、手外科専門医を参考。

http://www.jssh.gr.jp/jp/about/index_senmoni.html

資格認定委員会

委員長 関谷 勇 人

資格認定委員会は、担当理事の矢島弘嗣、アドバイザーの中島英親、委員の秋田鐘彌、近藤 真、辻野昭人、関谷勇人(委員長)で、専門医認定にかかわる審査などを行っております。また、当初は想定されなかった種々の事例について受験資格の有無などのお問い合わせが随時あり、これらについても対応させていただいております。

当委員会は2010年4月に施設認定委員会と統合されて、一時「資格・施設認定委員会」となりましたが、10月の理事会で元に戻すようご指示があり、現在は再び「資格認定委員会」として活動しております。

そのような事情で、2010年度の第1回の会議は4月の学術集会に合わせて資格・施設認定委員会として開催されました。

第2回は2011年1月13日に専門医認定申請の書類審査をWeb会議で行いました。今回の専門医認定には61名の申請があり、申請書類を事務局で整理していただいてから各委員にそれぞれの担当分を事前に配送しました。各委員はこの担当分の申請書類について受験資格を満たしているか否か目を通した後、当日のWeb会議で審議をしました。若干名の申請書類には不備や不明な点があったため書類の訂正や再提出をお願いし、再提出された書類は再審査の結果すべて合格となりました。しかし残念ながら1名については直近の5年間に日手会誌掲載論文がなく、不合格とさせていただきました。

このWeb会議は私にとって初めての経験で、会議途中で無線でのインターネット接続が切れるなどの小さなアクシデントがあり戸惑いました。しかしながら無事に審査を行うことができ、多忙な委員の皆さんの時間的そして身体的な負担を減らし、また費用も節約できる優れた方法であることがわかりました。

来年度以降の申請書類について、年号を西暦で統一することや、手術記録の添付漏れを防ぐために注意書きを増やすことなどについても協議し、また2011年度以降の審査については申請症例数が増えるため現在の4人の委員で実施するのはかなり困難と予想されるので、新委員の増員をお認めいただくように理事会に依頼することを確認いたしました。

最後になりましたが、事務局の皆さまには大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 宮坂芳典

ここ1年間で施設認定委員会は委員4名のうち2名が交替となり、新たに沖永修二と谷口泰徳(敬称略)が加わり、内山茂晴、宮坂芳典(委員長)と担当理事川端秀彦とアドバイザー奥津一郎の計6名で活動致しましております。2007年に創設された日本手外科学会専門医制度認定研修施設は当初基幹研修施設191、関連研修施設52の合計243施設が、日本手外科学会認定研修施設として認定されましたが、2010年12月末現在で基幹研修施設266、関連研修施設42の合計308施設となっております。そのうち初年度に認定を受けた施設で3年間で過ぎて2010年4月に基幹研修施設179、関連研修施設30の合計209施設が更新認定を受けております。一方ここ1年間(2010年1月-12月)で基幹研修施設32、関連研修施設4の合計36施設が新たに施設認定を受けております。

手外科専門医の勤務先異動に伴って、手外科専門医が不在となる施設認定の問題に関しては当該年度の3月31日までとしてそれ以降は打ち切る事が決定されております。特に関連研修施設でみられており、更新申請数の減少の原因となっているようです。この問題に関しては認定を受けた施設の手外科専門医が異動した場合には直ちに学会に報告するようお願いする次第です。また手外科学会が一般社団法人化するのに伴い、専門医評価機構のガイドラインに沿う形で施設認定の仕組みを改訂する作業を継続してゆく必要があります。

専門医試験委員会

委員長 清水弘之

専門医試験委員会は加藤博之担当理事、和田卓郎アドバイザー、鈴木克侍アドバイザー、佐藤和毅委員、磯貝典孝委員、柿木良介委員、村田景一委員、瀧川宗一郎委員、田中克己委員と委員長の清水弘之の計10名のメンバーで構成されています。平成23年4月の第3回専門医試験問題の作成と試験実施が第一で、12月からは特例措置によりなされた先生方の試験問題の作成と解説スライド、試験実地の準備に入りました。

第2回試験では両者をあわせて100点満点(筆答問題88点+口答問題12点)として、合否判定の線引きを単純化しました。平成22年度第2回専門医結果は[最高点92点、最低47点、平均点69.2±10.2点(Mean±S.D.)、Mean-S.D.=59.0点、合否ラインを60点と59点の間とすると受験者数:43名、合格:36名、不合格:7名、合格率84%、点数分布もきれいな正規分布となり、目標どおりの試験ができました。試験当日に御多忙の中、口答試験員や、筆答試験監督、採点に御尽力いただいた新潟地区評議員各位、試験推敲にご協力いただいた受験生の皆様、ならびに事務局各位の皆様に委員会を代表して御礼申し上げます。筆答問題は、最近の医師国家試験問題出題方式の変化に合わせて、解答選択肢が5つ以上ある多選択肢問題、正解を「すべて選べ」形式の問題、計算問題を新規作成しました。口答問題は、第2回試験では4題用意して受験者が好きな1題を選択し、これを試験官が試問する形式(12点)にしました。また正答率の極端に低い問題、識別率がマイナスの問題は不適切問題として削除する事しております。第2回試験ではそのような問題はありませんでした。

平成23年4月の第3回専門医試験では第2回と同様に筆答問題と口答問題を行い、両者の成績で合否を判定します。震災の影響により、第3回専門医試験は、場所を東京に替え平成23年4月17日(日)8時半から東京ステーションコンファレンス 5Fサピアホールで開催することとなりました。特例

措置によりなされた先生方の第1回特例措置専門医試験は平成23年4月16日(土)、東京ステーションコンファレンスで16時から1時間(解説30分、試験20分でマークシート方式)を予定しています。

委員会は平成22年5月から平成23年2月までに計6回行いました。5月27日(総会)、7月10日(土曜日)、9月4日(土曜日)、10月14日(基礎学会)、12月25日(土曜日)、2月11日(祭日)の合計24時間で筆答問題44題、口答問題4題を作成しました。特例措置の先生方への問題と解説も用意しました。委員会では、各委員の作成した問題を、エビデンスに基づいているか、解答文の1選択肢に2つの内容が含まれていないか、2重否定になっていないか、用語集に載っている用語を使用しているか、難易度は適当か、などをチェックします。各問題は、30分から1時間をかけて吟味され、さらに3回以上の繰り返しの検討を経て完成されます。

口頭試験の当日の準備は、今年は60人の受験生を予定していますので、1人20分で、4月17日の昼までに終了するため試問員は東京近郊の代議員の先生方にお手伝いをお願いする予定です。試験は全体として形成外科の先生にも受験しやすい様式に改変しておりますので、これまで受験を躊躇されておられた先生は是非受験し、力を試されることをお勧めします。試験の可否発表は5月末頃を予定しております。

最後に試験対策ですが、特例措置によりなされた先生には試験直前の解説講義は必ず受講していただくことをお勧めします。一方、新たに専門医試験に挑戦される先生には秋期教育研修会の受講をお勧めします。秋期講習会を最低1回は受講することが試験申請には必須ですが、同会では過去の出題試験問題を解説しております。また、いずれの先生におかれましても、日手会ホームページ上の公開試験問題をお試しいただきたく、お願いいたします。

最後に一言、特例措置専門医試験と第3回専門医試験の解答はマークシート方式です。筆記用具に鉛筆(HB、F、B)と消しゴムのご用意をお願いします。

カリキュラム委員会

委員長 酒井 昭 典

平成22年度のカリキュラム委員会は、加藤博之担当理事、田嶋光アドバイザー、石川浩三、恵木丈、光嶋勲、松下和彦、内田満の5名の委員と委員長の酒井昭典の計8名で構成しております。

1. 委員会の名称変更

日手会では外部に標榜可能な手外科専門医制度を確立するため、日本専門医制評価・認定機構(以下、専認構)からのアドバイスをできる限り反映するように、委員会や制度の改変を行っております。その一環として、平成23年1月から本委員会の名称は「教育研修カリキュラム委員会」から「カリキュラム委員会」へ変更されました。

2. 新カリキュラムの作成

本委員会のこれまでの活動は、手外科専門医の養成と専門医資格継続を目的として、研修カリキュラムの作成・検討・整備・検証と研修カリキュラムに従った教育研修講演申請の審査・認定を中心に行ってまいりました。さらに昨年12月より、本委員会は委員を2名増員し新カリキュラムを作成する作業を行っております。その理由は、専認構から現行の手外科専門医受験資格の不備を指摘されたからです。現行の受験資格は「カリキュラム11項目中6項目を術者あるいは受け持ち医として経験すること」になっておりますが、専認構は「手外科全範囲の研修経験があるべき」と考えております。そこで専認構の要求に応える新カリキュラムを作成し近く完成する予定です。新カリキュラムの要点は、1) 疾患・傷病を組織別に大項目I、II、IIIに3分類しました。大項目I：皮膚・皮

下組織・筋腱、Ⅱ：神経・血管・リンパ管、Ⅲ：骨・関節・靭帯、となります。2) 腫瘍及び類似疾患、先天異常、拘縮など複数の組織に及ぶ疾患は、この大項目Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに分けました。つまり、グロムス腫瘍、神経鞘腫、血管腫などはⅡに分類し、内軟骨腫、骨軟骨腫(外骨腫)、骨巨細胞腫などはⅢに分類し、Ⅱの拘縮の中に麻痺性拘縮、阻血性拘縮などの小項目を設けました。

現行のカリキュラムは主に疾患・障害に基づいて分類されていまして、これを組織に基づいて分類するにはかなりの労力を要しました。実際に、過去の教育研修講演申請を参考にして、新カリキュラムに基づき分類してみましたが、分類する上で大きな支障がないことが確認できました。ただ、「手外科の将来展望」や「手術手技の進歩」といった演題は、大項目Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにまたがると思われる、本委員会において個々に審査する必要が生じると思われました。さらにブラッシュアップを重ね、より良い新カリキュラムを完成したいと思っております。

3. 教育研修講演の審査・認定

以前から引き続き行っている業務ですが、申請された教育研修講演の審査・認定作業を、月1回電子メール上で行っています。講師資格が適切か、講演内容が研修カリキュラムに従ったものか、講演内容がカリキュラム項目に適切に分類されているか、を中心に審査しています。

以上、例年以上に活発な委員会活動を行っていることをご報告いたします。平成22年12月14日には、初めてWeb会議を開催いたしました。この貴重な経験を基に、今後も可能な限りWeb会議を行う予定です。

Web登録委員会

委員長 牧野正晴

Web登録委員会は平成23年1月9日の日本手外科学会(以下、日手会)臨時理事会において新規委員会として承認された。

その発足のきっかけは、社団法人認可後に、現行の日手会専門医制度で認可した専門医を「広告のできる専門医」とするために日本専門医制・評価認定機構(以下、専認構)のヒアリングを平成22年8月に受けたことに始まる。専認構の評価調査は専門医制度の総論にとどまらず研修項目、認定評価基準の整備、カリキュラムの明示、研修施設および指導者の認定基準の提示等具体的な精度の高い規則の整備を要求するものであり、その時点の日手会規則では専認構の要求に十分答えることができなかった。

一方、日手会の基本領域学会のひとつである日本整形外科学会(以下、日整会)において、従来紙媒体で行っていた研修記録、専門医資格申請に必要な症例記録等の情報を全てWeb登録するシステムの開発が開始されていた。これを応用して、専認構の指針に答えられる専門医制度を再構築するとともに専門医資格申請、および資格継続に必要な研修記録、症例登録等の情報をWebに登録し整備してゆくことを目的としてWeb登録委員会が発足した。

日整会の登録システムに上乘せする形で日手会のそれを作ることは日整会理事会の承認が既に得られている。

委員会メンバー:担当理事 佐々木孝理事長、アドバイザー 別府諸兄、委員長 牧野正晴、委員 橋詰博行、村瀬剛、亀山真、光岡和彦(株式会社JAPACOCO)

光岡和彦氏はシステムプログラマーとして日整会の登録システムを構築中であり、それに上乘せして作る日手会Web登録システムに欠かせないメンバーである。

今後の活動方針は専認構の認可が得られるように、カリキュラム委員会、専門医試験委員会、専

門医資格認定委員会、施設認定委員会との協議を重ね、専門医制度を見直して専認構の「専門医制度評価票」に答えられる制度に変えることである。

2月27日の日手会臨時理事会での討議を経て各分野での作業が開始され、遅くとも今年5月中には新しい日手会専門医制度規則を完成させる予定であり、この作業と平行してWeb登録システムが動くようにしてゆく予定である。

用語委員会

委員長 黒島 永嗣

日手会の組織改編により、昨年、用語委員会は有期限の特別委員会となった。手の外科用語集改訂第3版(2007年発刊)の後、CD化の課題に加えて、ホームページ(HP)上の用語集利用の検討も追加された。

1) 用語集のデジタル化

基本の用語集データは、改訂第2版で当時の浜田良機委員長・山梨大学整形外科の尽力で、デジタル化された。CD化やHP上の利用は、用語集のデジタル利用法と広く捉えることができる。問題はCD作製・添付のコストと必要な検索機能を実現するソフト利用のコストであった。日整会用語集の機能程度の実現だけで、用語集の価格は2倍以上になると見積もられた。加えてHPでの実現は別勘定である。

そこに2009～2010年に「Google日本語入力」試用版が無料で提供された。これを少しの工夫で用語集検索に利用できるとわかり、昨年の評議員会に提示しその方向での検討の了承を得た。そこで用語集改訂第3版の簡易版を用語委員会独力で作製し、利用説明と共に5月にネット配布を行った。その後「Google日本語入力」の完全版やWindows新版が出たために、用語集のデジタル完全版の配布は遅れた。Google日本語入力は完全版となっても無料配布は維持されており、Internet接続すると自動的に完全版に更新される。Windows新版への対応も確認したところである。

2) 改訂第4版発行への改訂作業

昨年4月～7月に全評議員(返答116名)による用語集の見直しを行った。ご協力に感謝いたします。不足箇所の追加見直しを委員全員で行い9月には集約作業を終えたが、評議員からの返答や追加意見は12月まで続いた。夏に二人の新委員が加わった。委員会は開催せずに作業をすべてネット上で行ったが、顔を合わせての討論では簡単に済むことも、ネットではすべてを書き言葉への変換が必要で、通常のネット会議では効率が悪く、別の工夫が必要である。

指摘は新規追加や基本的課題だけで数百項目、用語(エクセル表で6600行)については実に約1/3に問題が指摘された。異同の多くは、日整会用語では解剖学用語や形容詞は収載しないなどの編集方針の違いにある。

今年度で検討を終了できない可能性は高いが、一方、デジタル化の結果、検討を反映させた改訂第3版の修正デジタル版(Ver. 3.35などとして)の配布は、随時可能になったことは大きな進歩でもある。

代議員選挙について

日本手外科学会は平成22年年5月13日に一般社団法人となりました。設立時の代議員は日本手の外科学会解散時の評議員を選任いたしました。

平成24年は代議員選挙の年となり、以下のスケジュールで選挙を行います。

平成23年9月1日	選挙権の確定(9月1日現在の正会員に限る)
9月30日	会員への選挙の告知、有権者名簿の確定
10月中	立候補の届出
11月末まで	会員への候補者の通知
平成24年1月末まで	選挙期日
2月末	新代議員の選任

詳細なスケジュールは、今後立ち上がる選挙管理委員会で決定します。

専門医バッジ完成について

一般社団法人日本手外科学会認定手外科専門医のバッジが完成しました。

第1回特例措置専門医試験を受験された先生方に当日お渡しいたします。

なお、第1回特例措置専門医試験を受験されなかった専門医の先生方には郵送で、専門医バッジをお送りします。



関連学会・研究会のお知らせ

◆第17回春期教育研修会◆

会 期：平成23年6月4日(土)
会 場：大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
主 管：日本手外科学会教育研修委員会
詳細は決定次第、学会ホームページに掲載します。

.....

◆第17回秋期教育研修会◆

会 期：平成23年9月2日(金)・3日(土)
会 場：札幌市
主 管：日本手外科学会教育研修委員会
詳 細 は <http://www.jssh.gr.jp/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆専門医試験について◆

■第1回特例措置専門医試験は、以下の通り行われます。

日 時：平成23年4月16日(土) 16:00~17:00
場 所：東京ステーションコンファレンス 5Fサピアホール
形 式：指導者講習会(*) 30分、試験説明 10分、筆記試験 20分 計60分
詳 細 は <http://www.jssh.gr.jp/jp/information/gokaku.html>

(*)指導者講習会：4月16日の第1回特例措置専門医試験は、試験の説明ならびに指導者講習会を含んでおります。この指導者講習会を受講いただき、手外科専門医を更新いただいた先生方は、新設する手外科指導医となる予定です。手外科指導医の詳細につきましては、現在改訂中の専門医制度細則の完成をお待ちください。

次回の第2回特例措置専門医試験は平成23年9月3日(土)第17回秋期教育研修会と同時開催予定です。

■第3回専門医試験は、以下の通り行われます。

日 時：平成23年4月17日(日) 8:30~13:40
場 所：東京ステーションコンファレンス 5Fサピアホール
形 式：試験説明 10分、筆記試験 60分、口頭試験 15分
詳 細 は <http://www.jssh.gr.jp/jp/information/gokaku.html>

次回の第4回専門医試験は平成24年4月の予定です。申請要項については、夏頃公示の予定です。

.....

◆第5回日米手外科学会合同会議◆

東日本大震災を受け、中止といたしました。

編 集 後 記

東日本大震災で被災された先生方や被災地で懸命の診療や復興に当たっておられる先生方に心からのお見舞いを申し上げます。阪神淡路大震災の時に、地震によって一瞬にして都市が廃墟となり大勢の人が犠牲になる姿を目の当たりにしましたが、今回の地震では津波や原子力発電所の問題など、言葉を失うほどのさらに大きな被害が東北地方を中心に日本全体に及んでおり、自然の猛威には人智もかなわないことをあらためて思い知らされました。しかし、自然は確実に美しい季節も人にもたらしてくれます。桜の美しい季節となり、街はスーツに身を包んだたくさんフレッシュマンであふれ、病院でも新人の医師やコメディカルスタッフがご活躍のことと思います。美しい季節の移ろいとはじけるような若い力が、日本全体に活力を与えてくれることを期待したいと思います。
(文責：藤岡宏幸)

広報渉外委員会

(担当理事：落合直之，アドバイザー：田中寿一，堀内行雄，委員長 島田幸造，
委員：今谷潤也，小野浩史，佐藤和毅，白井久也，藤岡宏幸)